表現としての書評（日本文学）　序論：「ぼくが文学研究とかかわる理由」

倉井香矛哉

文学研究、――文学を研究するという行為遂行が不可避的に孕んでしまう自己矛盾のようなものをいつからか感じていた。むろん、これは衒学的な表現を言っているわけではない。まずもって、研究とは何なのか。そして、そこで対象化される文学とは何なのか。……本連載は、これらの問いに直接的に答えを提示しようとするものではないが、筆者の認識の根本的なところにかかる問題意識が伏在しているということを、ひとまずは付記しておきたい。また事実、第三者からの問いかけというかたちにおいても「文学を研究して何の役に立つの？」とはしばしば訊かれるところである。それは、異領域の研究者との学際的な議論の場であったり、あるいはまた、他愛もない語らいのなかであったりもする。こうした素朴な問いかけじたい、じつに文学の功利性をめぐって近代文学の草創期から語られつづけてきた言説の反覆でしかないのかもしれないが、しかしなぜ文学を研究するのか、ほかのあらゆる可能性を脱去してまでぼくが文学に賭けている理由はどこにあるのか、ということについては応答しておく責任があるのかもしれないと考えている。――「文学研究とは何か」という問いに客観的な答えはないが、「ぼくが文学研究とかかわる理由」、あるいは、その内在的な動機付けにかんしては何かを語りうるだろうからだ。

ゆえに、本連載のさしあたっての目的としては、おもに「日本近代文学」というカテゴリーで扱われる領域において、――そして、ときにそれを逸脱しながら――、ぼくが読みたいものを読み、書きたいことを書くこと（つまり書評）をとおして、文学とかかわらずにはいられないぼくの個人的な傾向を示してみたい。ただ、それだけのことである。むろん、こうした見立ては、書くという行為遂行をとおして裏切られていくのかもしれない。しかし、そうした挫折はある一面において、予定調和的な目的論には回収されえない文学研究の固有性をあきらかにすることであるかもしれない。

さて、連載をはじめるにあたって、その方法的な枠組みを以下に示しておきたい。まず、本連載では、さしあたっての「文学」の定義として、［書かれたこと・語られたことを媒介として、焦点人物たちの実存的な生を表象＝代弁しうるアクチュアリティを内包したテクスト］と定義しておく。何かを書くこと・語ることは、つねに-すでに〈外部〉へと開示される構造を孕んでいるがゆえに、言葉を書き、読むことは不可避的にアクチュアリティを――ごく一般的な功利性のレベルを超えたところで――孕まざるをえないのだ。それを受けとりうる〈他者〉を想定し、

まなざしてしまうかぎりは。またもちろん、それは自己言及的な語りをも排除するものではなく、テクストに内包されつつ、それを超越するものとして確信されるような（自己を対象化する自己をも含めての）他者性の発現こそが、言葉に意味を与え、世界像を立ち上げる――そのような認識を前提としている。

また、本連載では、いわゆる「日本近代文学」の歴史をその起点から通時的にたどっていく方法を採用することはしない。基本的には、読みたいものから読んでいくし、書きたいものから書いていく。というのも、よくある文学史の教科書的な時間軸（明治-大正-昭和-平成）を客観的な実在として前提とすることじたい、“あるひとつの恣意的に限定された見方”を選択することにほかならないからだ。――ぼくらは、「地球が太陽の周囲を廻っている」（地動説）ことを知識としては理解している。しかしながら、詩的真実あるいは経験的事実としては、「太陽が地球を廻っている」（天動説）と“表現”することを否定することはできない。表現 Expression は、かならずしも客観的な事実そのものを描写することではなく、主観-客観（あるいは内在-超越）の関係形式において、立ち現われた現象を-五感を媒介とする表象能力によって再構成することでもあるからだ。それに、もしも外部実在としての時間を前提とするならば、「日本近代文学」の起源を（さしあたりではあれ）設定しなくてはならなくなる。が、それは果たしてどこなのか。――坪内逍遥が『当世書生気質』を書いたときなのか。二葉亭四迷が『浮雲』を書いたときなのか。あるいはもっと以前の、西洋風に翻案された戯作ものが一世を風靡し、翻訳小説が流行したときなのか。……しかしながら、こうした問いは、「日本近代文学」という領土を実体論的に前提としたがゆえに生じた疑似問題にほかならない。じっさいには、書かれたもの・語られたものを受けとる“われわれ”が、事後的にそれらを「日本近代文学」としてカテゴライズし、それを相互確信しているにすぎないのであって、その外延を明確に設定したり、ましてそれをもとに“専門分野の領有権”を主張したりするのは本来的には不可能なのだ。それゆえ、本連載では、かならずしも「日本近代文学」のカテゴリーに属さないような古典や海外の文学、あるいは哲学書をも並行して取り上げることとする。「日本」と「近代」と「文学」の外延をあらかじめ定義することは不可能であるからこそ、領域横断的な知の交通性を手がかりとしながら、その輪郭をすこしずつ再構成していくほかないからだ。

ひとまずまとめておくと、本連載は、雑多な書評である。「日本近代文学」という領域をときに逸脱しつつ、ぼくが読みたいものを読み、書きたいことを書くというかたちになる。じつにトートロジカルで自己完結的な試みにほかなるまい。しかしながら、そもそも言葉を用いて〈外部〉へと何かを語りかけるという企ては、つねにそのような自己の孤絶を、――すなわち、届くはずのない声で〈他者〉に呼びかけるような絶望を孕んではいないだろうか。

執筆者

倉井香矛哉（くらい・かむや）

文学研究者、小説家、音楽家（作詩、作曲、編曲）、シンセサイザー奏者。イクトゥス・プロジェクトと称する学問・芸術にかかわる運動体を構想。主な業績としては、「次世代表現者たちの小魚群をめざして」『福音と世界』2012 年 2 月号（新教出版社）、「芥川龍之介『煙管』論――権威の相互的確証とその解体――」同人雑誌『あじーる！』創刊号などがある。

Twitter: @kamuya_kurai

Blog: http://blogs.yahoo.co.jp/kamuya_1999

HP: http://ichtus.net/

※この論考は、ネットカルチャー・ネットクリエイター情報サイト「NETOKARU」にて連載が予定されていた「表現としての書評（日本文学）」の序論として執筆されたものである。同サイトの閉鎖に伴い、同じ内容のテクストをイクトゥス・プロジェクトの公式 HP にて公開している（執筆者プロフィールは 2012 年当時のもの）。なお、計画されていた書評については、今後発表を検討中である。